暗号文書 Folio No. 46 の鍵 17「星」の説明箇所に、後にクロウリーによって示された鍵 17「星」を H に配置する帰属の兆しを見ることができるか、についての覚書

JAGD

（暗号文書については、原本のファクシミリ版を収録している後掲 Runyon（2005）を主に参照し、作成した。Folio のナンバーは後掲 Kuntz（1996）に従った。）

暗号文書 Folio No,46 の該当部分日本語訳（〔〕内は筆者注）

〔1〕　H〔ハイエロファント〕. 28 の小径＝ツァダイ＝自然の知性
〔2〕　&＝♒〔アクエリアスの記号〕＝男＝アダム＝回復される世界
〔3〕　H.　タロットの鍵をみる
〔4〕　シリウス
〔5〕　ヘー〔ヘブル文字のヘー〕＝♀〔金星ないし女の記号〕＝イシス
〔6〕　♒〔アクエリアスの記号〕＝女の足がのるマイム〔ヘブル語で水〕
〔〔3〕～〔6〕にかけて横にタロットの鍵 17「星」の簡略図が描かれている〕

1　前提として、暗号文書の当該箇所（〔5〕〕にあるヘブル文字は「ヘー」（以下、「H」とする。）であるか、それとも「ダレス」（以下、「D」とする。）であるか。暗号文書は、字形が崩れており問題となり得る。

（1）　D とみる場合の論拠は以下の二点と思われる。

ア．字形において、横線が左の縦線を越えている。

イ．「＝♀」と書かれている。♀（金星）は D に配属されるので、D と読むのが自然である。

（2）H とみる場合の論拠ないし（1）への反論。

ア．字体について

（ア）左に縦線が記されている。これは D にはない特徴であり、H・ケト・タウの特徴である。仮に D であるとしたら、このような記載はないはずである。

（イ）暗号文書において、H の書体について（1）アで指摘される特徴のある H が存在する（Folio No.35 など）。したがって、（1）アは H であることを否定する理由にはならない。

イ．「＝♀」との関係について

該当箇所は、前後の記述から鍵 17「星」の女の説明である点に異論はない。該当部分の「x＝♀＝イシス」について、D と H を挿入して平常文にして読んでみると、次のよう

になる。

D :「女は、扉（D）であり、ヴィーナス（金星）であり、イシスである。」 H :「女は、窓（H）であり、ヴィーナス（金星）であり、イシスである。」

いずれも、内容のおかしい文章であるが、H について、IHVH の最初の H とした場合、「H=ビナー＝至高の母」と変換することができる。これを挿入すると、次のようになる。

H' :「女は、至高の母（ビナー＝H）であり、ヴィーナスであり、イシスである」

D・H・H'の三者を比較した場合、H'が内容的にもっとも一貫性があることは明らかであり、当該文字は H であると考えるのが合理的である。

〔トーレンス（"The Secret Rituals of the Golden Dawn" P.178。『黄金の夜明け魔術全書』では上巻 P.268 に相当する。）をはじめ、歴代の暗号文書を敷衍して作られた４＝７儀式における Folio No,46 に該当する鍵 17「星」のカードについての説明は、ビナー、至高の母に言及し、H'と同様の見解に立っていえる。間接的にではあるが、H'の妥当性を支持するものといえる。そして、下記（参考）で示したように、黄金の夜明け団のとのリンケージを強く主張するザレウスキーやクラークらの暗号文書の翻訳でも、当該文字を H と取っている。これらを勘案すれば、黄金夜明け団においては、最初期から一貫して当該文字を H と読んでいたことは明らかと思われる。

（参考）手持ち資料で確認できた Folio No. 46 の該当文字の取り方について

１．「ダレス」とするもの

確認できたものは、下の一例のみである。

Hermetic Library 所収" The Cipher Manuscript"

（https://hermetic.com/gdlibrary/cipher/cipher37）（2020 年 7 月 1 日採取）

２．「ヘー」とするもの

手持ち資料では、紙媒体で発表されたものは全て H である。

P. A. Clark, J. B. Morgan, Jr."The Secret Cipher of the Golden Dawn"(1995), p.169.

D. Kuntz "The　Complete Golden Dawn Cipher Manuscript"（1996）, p.142.

C. P. Runyon"Secrets of the Cypher Manuscript"(2005), p.149.

P. J. Zalewsiki"Secret Inner Order rituals of the Golden Dawn "(1988), p.52,(なお、再版された同(2016)p.87 においてはヘブル文字のフォントを導入しているが、ケトになっている。誤字であろう。).〕

（３）　以上を勘案すれば、暗号文書の当該箇所にあるヘブル文字は H である、と理解するのが妥当である。

以下、H であることを前提に論じる。

２　当該記載において、鍵 17「星」を H とする見解の「予兆」ないし「萌芽」を見ることができるか。

（１）　見ることができないという説について、筆者は、現段階において十分に理解できていない。そこで、私見のみを述べる。

筆者の見解は、該当箇所に鍵 17「星」を H とする見解の「予兆」ないし「萌芽」を見ることができる、というものである。

〔私見に立った場合、第三団（秘密の首領、隠された霊的進化を遂げている達人たち ,etc.）の指導を認める見解に仮に立つとしたら、クロウリーの「鍵４『皇帝』と鍵 17『星』の交換」について、「暗号文書は第三団の指示により作成され、ウェストコットらを通して、GD 団にもたらされたところ、クロウリーは、その暗号文書において、萌芽の段階にとどまっていた鍵 17『星』・ヘー（星はツァダイではない）について、エイワスの指導を受け、生命の木とタロットの帰属表を見事に完成させた」と評価することができるかもしれない。〕

（２）以下、簡単にその理由を述べる。

ア　暗号文書の該当箇所は、あくまでも鍵 17「星」の女の説明である点については、異論はない。また、28 の小径（ツァダイ）の解説において鍵 17「星」のカード論じたものであることは明らかである。このことから、暗号文書の（物理的な）作成者において、鍵 17「星」を H の小径（15 番目の小径）に配属する意図がなかったといえる。

しかし、鍵 17「星」のカードにおいて、女は主たる題材の一つである。カードの主たる題材が H であるならば、カード全体について H とすることは自然な推論といえる。

加えて、暗号文書を前提とした場合、該当箇所の直前〔４〕には、「シリウス」との記載があり、一般にシリウスがイシス（の星）を意味するものでもあること（「シリウス＝イシス」）を勘案した場合、前記 H'は下のように変換できる（なお、シリウスは星であるから、カードにある大きい星の説明であること（「星＝シリウス」）を前提とした。）。

H"：「星は、シリウスであり、（女である）イシスであり、ヴィーナス（金星）、そして至高の母（H）である」

H"の成立を認めた場合、鍵 17「星」のカード全体を H に帰属させることに、それほど違和感を覚えず、クロウリーにおいて打ち出された鍵 17「星」を H に帰属する見解の「予兆」「萌芽」を暗号文書に認めることに、筆者はためらいを覚えない。

なお、当該暗号文書においては、更に女の下にある水について説明をしているが、H を

ビナーを意味すると見た場合、鍵 17「星」を H とみることを妨げるものではない。

イ　また、実際においても、鍵 17「星」を H とするクロウリーの後継者たちの著作においても、H”に類似する、至高の母、大いなる母をバイバスにして H を導く論証（例えば、後掲 Duquette（2003）の論証を簡略すれば、「鍵 17『星』の女＝ババロン／ヌイト＝至高の母＝IHVH の最初の H、よって 17＝H」といえる。）で解説がなされている（L. M. Duquette”Understanding Aleister Crowley's Thoth Tarot（2003）”の星の解説部分。J. A. Eshelmen”Lber Θ”（2011）の星の解説部分及び同書で引用している同人の”776 1/2”部分など。）。これは私見を強化する事実である。

３　最後に（蛇足）

本稿は、歴史的に鍵 17「星」を H とする見解の起源、あるいは同見解を誰に帰属させるべきかを探ろうというものではない。本稿の目的は、日本で論じられることの少ない暗号文書について、注意を喚起する点にある。

なお、オカルト、ことに実践オカルトにおける学説の取り扱いは、一般の学術におけるそれと異なるように思われる。特に、「啓示」や「第三団」による教導を前提とすると、その取扱いは表現しがたい。全てのオカルト理論・学説は認識されないだけで、既に与えられており、それに気づくかどうか、ともいえる。実践的オカルティストにとって、重要なのは、整った論理的な論証ではなく、論理の飛躍であり、認識の飛躍であり、天啓であるかのようにさえ思われる。それは、現代の学術的な思考とは真逆であろう。

筆者は、実践オカルトに携わる一人として、実践オカルトに関係する事柄を、どの程度、現代のルールに則って論じるべきか、判断が付きかねている。現代のルールを適用した場合、あまりにも多くが排除されることになり、それは利益より損失が大きいのではないか、と疑っている。本稿も現代のルールに則って作成されたものではない。（JAGD）